内村鑑三先生自筆原稿

第一集

A005

内村鑑三先生自筆原稿

第一集

内村鑑三先生自筆原稿目録　第一集

「聖書之研究」誌原稿

七点

信者と現世
我が平和と歓喜
贖罪と復活
信仰の勝利
ステパノの演説
福音大観
発行満十五年

拝啓 内村先生記念文庫設置趣意書
を拝見致しました。私のところに姉崎さん
選ーした古い文書のうちより内村先生自
筆の原稿「信者と現世」「死の種成」「積円
形の話」より、Darkness and Light (全訳文
暗黒と光明)の四稿を見出しましたので
別便にて差し上げますのでよろしく御願い致します
二月二十五日 有島
千代田区紀尾井町三(三三二)三七八〇
三谷隆信

信者と現世

大正三年四月
第一六五号

三谷隆信氏寄贈

郵便はがき

日本郵便 5

安[illegible]田谷区羽根木町一六八一

渡辺五六 様

コクヨ 255

信者と現世

聖書之研究

新段十七行

二月十五日、柏木聖書講堂に於て為さゝし講演の主要部分

内村鑑三

信者は地の所屬（もの）では無い、天の所屬（もの）である、世の所屬では無い、キリストの所屬である、然し乍ら、彼は今猶ほ現世（よ）に在る者で

ある、故に現世と深き関係に於て在る者である、信者が現世に對して採るべき態度如何、信者は現世のために何を爲すべき乎、又何を爲し得る乎、是れイエスが茲に教へ給ふ所である。

イエスは言い給ふた 汝等は地の鹽 なりと、又汝等は世の光なりと。

汝等は地の鹽なり

地は下の世界である、上の天に對して稱ふ、地も亦神の造り給いし者である、故に善きものである、然し乍ら、肉の人を宿す所なるが故に甚だ腐敗し易くある、實に腐敗し易きは地の特性である、

時に地神の前に乱れて暴虐地に満ちたりとは既にノアの時に於ける其狀態であつた（創

世記六章十一節、邦譯に「世」とあるは誤譯である）、又

一 エホバ天より（地の上）人の子を瞰たまひしに、彼等は悉く腐れたり

とある（詩篇十四篇二、三節）、地は暫時的のものである、天の如くに永久的のものでない、故に腐れ易くある、故に腐敗を止むるために常に

防腐剤を要するのである。

聖書の研究

鹽は昔時の唯一の防腐剤である、鹽に由て食物の味は保存せられ、其腐敗は防遏せられたのである、而して信者は腐敗し易き此地の防腐剤であるとのことである。

事は至て平明である、然し凡て深遠にして普遍的なる事は平明である、イエス

民

の菜子に由て地の味は保存せられ、其腐敗は止めらるるのである、信者が信者の職務に忠實おらずして、地の腐敗は其度止する所を知らざるのである。

地は腐れ易くある、然し乍ら、腐れ易きは其中に生命があるからである、生命の無い所には腐敗は無い、腐敗は生命の徴候である。

聖書の研究

地に生命の在る事とは事實である、福音の到らざる所にも道德がある、人倫がある、

福音

~~[illegible]~~ 無くして道德あるかと云へば大なる過誤である、福音以前に、希臘羅馬に、支那日本に美しき高き道德があった、又福音以外、佛教に儒教に神道に清き深き倫理がある、眞理と生命と

は基督教のみに限らない、全地は神の榮光を現はして居る、眞、善、美の或る反照は之を地上何れの所に於ても認むることが能る、而して是れ悉く神の賜物であつて、保存し、尊重し、感謝すべきものである。

然し乍ら地の生命は甚だ腐れ易くある、

其新鮮なる時期は短く、其潑剌たる期間は少時である、地上の生命は忽ち腐敗し、暫時にして硬化す、

焉

怜かも人生の短かきが如くである、其繁榮は槿花一朝の夢である。

茲に於てか鹽の必要があるのである、既存の善

難を保存し、其美を發揚し、之をして更ら
に地の涵養を助けしむる。或者の必要が
あるのである、而して神の生命の言辭を心靈に
受けし信者が地の此必要に應するのであると
の事である、信者に由りて福音以外の諸德、
[redacted]信者以外の諸善が保存せられ、發揮
せられ、流布せらるとの事である。

而して此事は世に隱れたる事實である。[redacted]
[redacted]キリストの福音に由て舊道德と舊國
信仰とは眞正の意味に於ての復活を見る
のである、イエスは此事を教て曰い給へ、
我れ律法と預言者とを廢るに來
れりと思ふ勿れ、我れ之を廢るに來
りしに非ず、成就に爲ぬり
と（五章十七節）而して此事たる舊約の

直ぐ後で

6

律法と預言者とに限らるゝのである、凡ての宗教又は道徳に於て然るのである、希臘羅馬の舊き道徳も、印度の佛教波斯の火教も、羅門教も、支那の儒教も、彼斯の火教も、イエスの福音の鹽に接して其眞髓を發揮せられたのである、東洋諸國に於て福音は儒教と佛教とを廢せずして返て之を超しなのである、

今や最も該博なる佛教研究は佛教國に於て行はれずして基督教國に於て行はるゝのである、今や最大の佛教興者は印度又は日本に於ておらずして英國又は佛國又は独逸に於ておるのである、モニエー・ウイリヤムス氏の如き、マックス・ムラー氏の如き、其他世界的佛教興者の多數は基督信者であつたのである、而し

7

て又我國の神道に就てさへも、アストンの如き、ノックス氏の如き、又自身は基督信者に非ずと稱するも而かも同じく基督教國の産なるチャムバーレン氏の如きが、世界的眼光を以て甚研究に從事し、比較宗教學的に其編奥を探り、[illegible]て廣く之を世界に紹介せしに照らして見ても、キリストの福音の真理決して神道の破壞者にあらざることを知るに

聖書の研究

足りるのである。

而して余輩は亦同一の事を宗教以外の事に於て見るのである、日本國に於て二宮尊徳、上杉鷹山、日蓮上人等の世界的價値と偉大とを認めて之を世界に紹介した者は何人である乎、彼等は皆な明白に自身はイエスの弟子たりと表白する人等

8

では無い乎、佛教徒には外教徒ありとて憎まれ
自稱愛國者等には國賊なり逆臣なり
と唱へられし基督信者が起て日蓮上人
はモハメットに勝り、ルーテルに比敵すべきと大言家
である、二宮尊德は萬國の敬慕を惹くに
足る農聖人であると言いて、日本人の精神
的偉大を世界に對して鳴らした者では無い乎、

イエスの弟子は孔子の弟子又は釋迦の弟
子を憎みて彼等を葬り去らんと欲する者
では無い、其正反對が事實である、鹽が
食物の味を保藏するが如くにイエスの弟子は
他宗他教の眞理を保藏し且つ發揮する
のである、佛教も儒教も、其他すべての宗教
も、イエスの福音に由て永く地上に保存せ
られて、其光を放つべき者である。

基督教は忠孝道徳の破壊者
なりとの邦人の套語に就ては茲に之
を辯明するの必要はない、忠孝道徳を
破壊する者は基督教ではない、常
に破壊者は憤慨する邦人自身である、
忠孝道徳は基督教を俟たずして

破壊されつゝあるのである、収賄の故を以て
君國の名を世界に向つて辱かしめし者は
基督信者では無かつた、放埒の故を
以て本山の存在を危くせし者は基督教
の僧侶では無かつた、忠孝道徳を喧しく
口にする者必しも忠臣孝子では無い能

我が平和と歓喜　大正三年十月　第一七二号

藤本武平氏寄贈

我が平和と歡喜

我が平和と歡喜とは事業の成功に於て在らず、智識の上進に於て在らず、良心の滿足に於て在らず、キリストと彼の十字架とに於て在り、彼を待望(まちのぞ)サ

之を仰瞻(おほぎみ)て我に人のすべて思ふ所は
過ぐる平和と歡喜とは有るなり、
我を事業家と想ふ人、思想
家と看る人、道徳家として扱ふ
人は、我が在在の根柢なる、我が贖罪(あがなひつみ)を
知らざる者なり。

聖書の研究

贖罪と復活

大正三年十一月
第一七二号

藤本武平二氏寄贈

贖罪と復活

是れは「基督教とは何ぞや」との題目の下に過る夏、基督教青年會夏期學校に於て講演の草稿である。

内村鑑三

イエス我等が罪のために附されぬ、又我等が義のために(又は義とせられんがために)甦らされたり(羅馬書四章廿五節)

パウロの遺した言辞の中に一言にして基督教の全部を言盡しおる者は甚だ少い、羅馬書

の此一節の如きは確に其一つである、能く
此一節を解した者が基督教を解した者である
と思ふ。
イエスは其敵人の手に附されん彼等の殺す
所となつた、其事は明白なる歴史的事
實である、然し彼は御自分の罪のために此屈

辱を嘗め給ふたのである、彼は我等の
ために、全人類のために、特に我等彼を信ず
る者のために此苦き杯を飲み乾し給ふ
のである、實に彼は我等の愆のために傷け
られ我等の不義のために碎かれ給ふたのである
（以賽亞書 五十三章五節）
る、神は獨に在りて我等の罪を罰し、彼
を信ずる我等を義とし給ふ御自身義た

らんが為めの途を設け給あたのである（三章
廿六節）。イエスは十字架に上りて我等に代りて
罰せられ給あたのである、彼の苦痛に由
りて我等の已往の罪は赦されたのである、是
れ福音である、現代の牧師、神學
者、教會信者等の嘲ける所の福音である、

而かも此福音たるや痛める良心は癒されず
たのである、（憂歎）
御自身懲罰を受けて我等に平安を與へ、
彼の打たれし傷により我等は癒されたり
と（以賽亞書五十三章五節）、我が為すを得る善
行によりてではない、我が努力に由る心靈の清淨
によりてではない、イエスが我が罪のために罰せられ

給ひしに由り、我は神の前に立ちて義を得、
我が罪の消滅を信じて疑はざるのである。
我は我が心靈の奥験に由りて其子イエスキ
リストの血すべて罪より我等を潔めとの
使徒ヨハネの言を文字通りに解釋して
憚らないのである。（約翰一書一の七）
聖書の研究
イエスは我等の罪のために訣人に附され其殺

す所と成り給へた、然し其れが萬事の終
結ではなかつた、彼は一死に繋がるべき者ではな
かつた、彼は更り給へた、神は彼を甦らし給
へた、然し我等のためには一死たりし彼は復り給
自身のためにのみ甦り給へたのではない、神はイエ
スの偉德を愛でたまひて、彼れ御一人に復活
の恩惠を降し給へたのではない、イエスの一死は

我等のためでありしが如く、彼の復活も亦我
等のためであつた、日本譯聖書に「我等が
義とせられんが為に」とあるは確に誤譯
である、原語の ὁ δικαίωσις ἡμῶν
の儘に「我等の義の為め」と譯すべき
である、イエスに我等の罪のために附され、我
等の義の為めに甦らされたのである、神はイエス

の死を以て我等の罪を宣告し、彼の復活を
以て我等を義とし給ふたのである、イエスの
横死は我等の罪の證據である、其如く、
彼の復活は我等の義我の（既に義とせられ
し）證據である、我等の罪の恐ろしさを見
人も欲する手、之をイエスの十字架に於て見
るべきである、我等の義の附與（せらるゝ）の美（うるはしさ

を見人と欲する事、之を彼の復活に於て見るべきである、イエスは人類、殊に信者の代表者である、故に彼の死が代表的であり、亦彼の復活も代表的であった、神はイエスに在りて人類を四刻し給いて、亦彼に在りて人類を義とし給ふたのである、イエスの死に人類の審判である、彼の復活は人類の彰榮である、

神は既にイエスに在りて人類の罪を赦し、而して罪を赦しるに止まらず、彼に在りて既に彼等に榮光を着せ給ふたのである、人類の受刑は既に彼に在りて済み、彼等の榮光も亦既に彼に在りて獲得せられたのである。

斯くて神の側に在りては人類の罪は既に全く消滅され、人類は既に榮光を被せられたのであ

る、今は唯人類が神の恩惠の配與に應ずるか
否や、其問題が殘つて居る主である、而して此問題の解決たるや至て容易
であるのである、人は何人も信仰を以て神の此
配與に應じて今、即時に神がイエスを以て
下し給ひし救ひ成就すべての恩惠

聖書の研究

祉を己が有となすことが出來るのである、
人類は今は既に救はるべき狀態に於て
在るのである、而して信者は信仰を以て神の
招命に應じて此救はるべき狀態に入つた者
である、イエスに在て人類の救濟は既に
成就られたのである、實に救濟は人類が
を得る

己が理想を遂げて終に到達する境(きやう)ではない、神が既にイエスに在りて[illegible]絶し[illegible]人類既(すで)に得(とく)の特権である。

我罪の赦免は、我はイエスの十字架に於て見る、我は日に三たび自己に省みて、汚れたる我を自から潔(きよ)くせんと為ある、我は自己が潔清を道徳の履行に於て求の

13 基督の研究

一行カケ

7

ある、唯イエスの十字架を仰瞻(あをぎみ)る、彼所(かしこ)に我罪は除かれ、我が潔清(きよめ)は行はれた、イエスは我に代りて[illegible]其血によりて[illegible]罪より我を潔の給(のぞ)まる。

我が後活は？是れ亦既にイエスに在りて行はれたのである、我は今や復活の有無に就て議論を闘はすの必要はない、我は既にイエス

に在りて贖りたのである、神は我を義とし給ひ
しが故にイエスを贖らし給ふたのである、イエスの復
活は彼れ一人のための復活ではない、
人類のための復活である、すべて信ずる者
の復活である、人類が罪を犯したるが故に、
其代表者たるイエスは死に陥されたのである、
而して人類の罪が赦されしが故に、其代表

者たるイエスは死の黙示録より釋かれ、復活罪
天し給ふたのである、人類に臨むべき事は
善も悪も其代表者たるイエスに臨んだ
のである、我等は人類の運命をイエスの
傳記に於て讀むのである、而してイエスの
贖らされしを見て、人類の罪、殊に信者の
罪、然り、我が罪の既に除かれ、我は既に

神の子たる自由に復帰されたる者であることを識るのである。

イエスは我等の罪のために陷され、我等の義のために（義とせられしがために）甦らされたり、

是れが福音である、人に向て「汝等努力

奮闘して完全の域に達せよ」と説くのではない、汝等は既に救はれたれば信じて其救を贖ととどが有せよと説くのである、我等は今は既に贖はれし時代に於て生活して居るのである、人世はイエスの一死と復活とに由て既に一変したのである、救済は

人数が之に到達する前に神より既に
人数に臨んだのである、故に福音の宣
傳者は預言者の言を以て叫ぶのである、

汝等の神エホバ言ひ給はく、
慰めよ、汝等我が民を慰めよ、
懇切に エルサレムに語りて之に耳語きて告げよ、
その服役の期既に終り
その科既に赦されたり

（聖書研究 明治三十三年一月二日）

信仰の勝利

大正三年十一月
第一七二号

藤本武平氏寄贈

信仰の勝利

戰はずして勝ちし實例

歷代志畧下第二十章解譯

聖書を以てする聖書の解釋

内村鑑三

我等をして世に勝たしむる者は我等が信なり。約翰第壹書五章四節。

諸の民は騷ぎ立ち、諸の國は動きたり、

神、その聲を出し給へば地はやがて融けぬ。

……

來りてエホバの事跡を看よ、彼は懼るべき事を地に爲し給へり。

エホバは地の極までも戰鬪を廢めしめ、弓を折り、戈を斷ち、戰車を火にて燒き給へり。

汝等靜まりて我の神たるを知れ、我は諸の國の中に崇められ、全地に高く興げらるべし（と エホバ曰給ふ）

萬軍のエホバは我等の神なり、ヤコブの神は我等の高き樓なり。

（詩篇四十六篇六節以下）

此後モアブ人、アンモン人、及びマオニ人等ユダの王ヨシヤパテと戰はんとて攻來れり、時に或人來りてヨシヤパテに告げて曰く海の彼方スリヤより大衆汝に攻來る、視よ今ハザゾンタマルに在り」と、（ハザゾンタマルは死海の西岸エンゲデなり）、茲に於てヨシヤパテ懼れ面をエホバに向けて其救拯を祈求めたり、又ユダ全國に斷食を布告し達したれば、全國挙りて集り、[redacted]エホバの救拯を祈來めたり、即ちユダの一切の市邑より人々來りてエホバ

來りてエホバの事蹟を着よ、彼は懼るべき
地に爲し給へり。
エホバは地の極まで戰鬪を廢めしめ、弓を折り、戈
を斷ち、戰車を火にて燒き給へり。
汝等靜まりて我の神たるを知れ、我は諸の國の中
に崇められ、全地に高く擧げらるべし（と エホバ 曰給ふ）
萬軍の エホバは我等の神なり、ヤコブの神は我等の高き
樓なり。
（詩篇四十六篇 六節以下）

此後モアブ人、アンモン人、及びマオニ人等ユダ
の王ヨシヤパテと戰はんとて攻來れり、時に或人來
りてヨシヤパテに告げて曰く海の彼方スリヤよ
り大衆汝に攻來る、視よ今ハザゾンタマルに在
り」と、（ハザゾンタマルは死海の西岸エンゲデなり）、茲
に於てヨシヤパテ懼れ面を エホバに向けて其救拯を祈求めたり、又ユダ全國に斷食を
布令し達しければ、全國擧りて集り、[illegible]
[illegible]、エルサレムに來り エホバの救拯を祈來め
たり、即ちユダの一切の市邑より人々來りて エホバ
の救拯を祈求む。時にヨシヤパテ、エホバの聖

や内ふる
殿の新
きの前に於てユダとエルサレムの會衆の中に三
たてまつりけるは
我等の先祖の神エホバよ、爾は天の神にまし
ますに非ずや、異邦人の諸國を統たまふ
に非ずや、爾の手には能力ありて、權威ありて、
何人も爾に抗ふ能はざるに非ずや、我

祷

等の神よ、汝は此國の民を汝の民イスラエルの前より驅逐たまいて、汝の友アブラハムの子孫に之を永く與へ給いしに非ずや、彼等は此に住み、汝の聖名のために此に聖所を建て言へり「刑罰の劍、疫病、饑饉等の災禍我等に臨まん時は、我等此殿の前に立ちて汝の前に居り、我等の苦難の中にて呼號はらん、然らば汝聽きて救極け給はん」そは汝此殿に在せばなり」と、今アンモン、モアブ、及びセイル山の民等を視たまへ、往昔イスラエル、エジプトの國より出來れる時、汝、イスラエルに命じて此民を侵さしめ給はざりしかば、彼等はイスラエルは之を離れて滅さざりしなり、然るに今彼等が我等に酬る所を視た

まへ、彼等は仇を以て恩に酬ゐ人とす、
彼等は汝が我等に有たしめ給へる汝の領
土より我等を逐攘はんとす、我等の神よ、
汝、彼等を鞭を給はざるや、我等は此の
斯く攻寄せ來れる大衆に當る能力なく、
又爲す所を知らず、唯汝を仰き瞻るのみ

聖書の研究

と、四王、斯く祈りし間に、ユダの人々は其幼者
及び妻子と共に皆ホルバの前に立ち居れり。
時に會衆の中にてホルバの靈、アサフの族なるレビ
人ヤハジエルに臨めり、(ヤハジエルはゼカリヤの子にして、
ゼカリヤはベナヤの子、ベナヤはエイエルの子、エイエルは
マッタニヤの子なり)、ヤハジエル即ち曰いけるは、
ユダの人々及びエルサレムの市民、並にヨシヤパテ王
よ、聽け、ホルバ斯く汝等に言い給へり、汝等此

大衆の故に懼るし勿れ、懍く勿れ、そは是れ
汝等の戰に非ず、エホバの戰なれば なり、汝等
明日彼等の所に下るべし、彼等はヂツの坂路
より上り来る、汝等エルエルの野の前なる谷の口
にて之に遇はん、此戰鬪には汝等戰ふに
及ばず、ユダ及びエルサレムよ、汝等は唯進みて
立つべし、汝等と偕に在すエホバの汝等に施し
給ふ救拯を見よ、懼るゝ勿れ、懍く勿れ、
明日彼等に對ひて進むべし、エホバ汝等と偕に

聖書の研究

在せばなり。

茲に於てヨシヤパテ首を下げて地に俯伏せり、ユダ
の人々及びエルサレムの市民も亦エホバの前に俯
伏してエホバを拜す、時にコハテの族及びコラの族な
るレビ人、等[illegible]起立りて聲を高く揚げて
イスラエルの神エホバを讃美せり。

斯くて彼等皆な朝早く起きてテコアの野に出往

り、其の出るに當りて、ヨシヤパテ 都 立て曰ひけるは

ユダの人々及び ■ エルサレムの民等よ、我に聽け、汝等の神エホバを信ぜよ、然らば汝等固く立つを得ん、その預言者を信ぜよ、然らば我等榮ゆるを得ん

22

と、彼れ又民と議りて人を選び、彼等をして聖服を着け群衆の前に進ましめ、エホバに ■ 向ひて歌を唱へ且つ彼を讃美せしめて曰く

エホバに感謝せよ、
その其恩惠は世々限りあるければ也、

と、而して 彼等が 其 歌を歌ひ、讃美を始むるに當りてエホバ伏 ■ を設けてユダに攻來れるアンモン、モアブ、セイル山の民等を苦しめ給ひければ、彼等は 數 破られたり、即ちアンモンとモアブの民等起ちてセイル山の民に對ひ、悉く之を殺し盡しかり、而して相互に滅しあつり。

斯くてユダの人々荒野の望樓に到りて敵の群衆を見たりければ、唯地に仆れたる死屍のみにして一人だに逃れ去りし者なかりき、茲に於てヨシヤパテ及び其民、彼等の物を獲んとて來り見るに、その死屍の間に財寶、衣服、及び珠玉等夥しく在りたれば、各自之を剝ぎとりけるが餘りに多くして携へ去るをも能はざる程なりき、分捕物多かりしに因りて

之を採集むるに三日を費せり、第四日に民皆ふべうカの谷に集まり、其處にてエホバに感謝せり、此故に其處を今も尚ほべうカ即ち感謝の谷と稱へ、而してユダとエルサレムの人々皆な歸來り、ヨシヤパテ彼等を導きて凱旋せり、そはエホバ彼等をして其敵を滅して歡喜を得させ給ひたればなり、即ち彼等琴と琴テと喇叭を合奏してエルサレムに往きて エホバの聖殿に到れり、

神を畏るゝの恐怖、隣邦の民等、エホバかイスラエルの敵に對いて
に陥めり、そは彼等
戰い給いしことを聞きたればなり、斯くて其後、
ヨシヤパテの國は平穏なりき、そは神、其四方に於
て之に安息を賜いたればなり。（第一節より第三十節
まで）。

敵軍に對して進む、彼等は戰はんと欲せ
ず、エホバの彼等に代りて戰い給ふを仰
見せんと欲す、故に彼等は軍樂（ぐんがく）を奏せ
ず、讃美の歌を唱ふ、曰く「エホバに感謝せよ、
そは其恩惠（めぐみ）は世々限りなければなり」と、而して
讃美の聲未だ息（やま）まざるに、彼等は敵軍
の間に大なる擾乱の起るを見たり、敵は何
等かの誤錯（ごさく）よりして相互を殺し盡すに至れ

り、始めにアンモンとモアブとは[illegible]一隊と為りて
セイルの軍に打懸りて之を殲滅し、後に
アンモンとモアブとは相互を屠れり、斯くてイス
は其手に血塗ずして其敵を滅し、
エルはだゞ戰場に下りて自から斃れし敵の死屍
より、其携帯せし武器財寶を剝取るに
過ぎざりき。
斯くて戰鬪は祈禱を以て始まり讃美を以て
終りたり、而して四隣の國民はエホバの其民のために
戰い給ふを見て、其敢て境を侵す者なく、
ヨシヤパテの國は其後平穏なるを得たり。

註　マオニ人はセイルの山の民とあればヨドム人なるべし。

り、始めにアンモンとモアブとは奮一隊と去りて

教訓

○非戰主義といふは必しも絶對的に戰はないと云ふ事ではない、自分で戰はないと云ふ事である、若し戰ふの必要がある場合には、神をして自分に代て戰っていただくと云ふ事である、「仇を復すは我に在り」と彼は

言ふ給ふた、國家に「戰爭は汝等の事に非ず、エホバの事なり」である、戰爭の事を全然神に任かし奉る時に、茲に初めて眞の意味に於ける非戰主義が行はるゝのである。

而して神は戰ひ給ふ日に當りて敢て自ら聖手を下し給ふのである、彼は敵

をして自から己れを滅ぼさしめ給ふのである、アンモンとモアブとをしてセイルを打たしめ、而して後にアンモンとモアブとをして相互を滅さしめ給ふ、

悪人の相結ぶは勿論相愛するがためでは無い、同一の憎悪敵がからであるに過ぎず、其敵にして取除かれん乎、彼等は必ず相互を害するに至る、聖書に「悪に抗する勿れ」

とあるはこれが爲めである、悪人は抗するは
相合し、抗せざれは互に相食む者である、
無抵抗は悪人を敵死するための最良の
方法である、我等は神に倣ひ、悪に抗せず
して、悪をして自滅せしむべきである。
○若し我等に敵を敵死するための武器があると
すれば　それは樂器である、而かも敵愾心を
聖書の研究
鼓舞するための樂器ではない、神を讃美
する為の樂器である、琴と琴と喇叭と
である、「王杖に感謝せよ、そは彼の恩惠に
限りふければ也」と聲を揚げて歌ふ時に、
其聲を助くるための樂器である、信者は
鬨の聲を揚げて敵に向ふべきではない、神
を讃美しながら進むべきである、敵の要
塞を壞つに當りても、ヨシユアがエリコの邑と
陷れし時の如くに、唯すべての喇叭を吹きながら
神が其石垣を壞ち給ふ其時を待つべきである。

方法であるが、手段である。

して、悪をして自滅せしむべきである。

○若し我等に敵を撃滅するための武器があるとすれば、それは樂器である、而かも敵愾心を鼓舞するための樂器ではない、神を讃美

するための樂器である、琴と琴と喇叭とである「エホバに感謝せよ、そは彼の恩惠は限りなければ也」と聲を揚げて歌ふ時に、其聲を助くるための樂器である、信者は闘の聲を揚げて敵に向ふべきでない、神を讃美しながら進むべきである、敵の要塞を壞つに言葉のみならず、ヨシユアがエリコの城を陷れし時の如くに唯ヨベルの喇叭を吹きながら神が其石垣を壞ち給ふ其時を待つべきである。（約書亜記第六章を見よ）。

○自分から劍を抜いて敵に向ふ者は基督教國ではない、「若し汝の敵国があるとならば、それはヘゼキヤ王の下ユダ國」（以賽亜書三十六章乃至三十七章）

ハ如き者、又我等が茲に舉げしヨセヤハテ王の
下のユダ國の如き者でなくてはならない、獨逸
民族の文化を護るために劍を拔いたと云ふ
獨逸國は勿論基督教國ではない、又歐洲の
自由を護るために劍を拔いたと云ふ英國も
露國も基督教國ではない、殊に自から劍を
拔きながら神に戰勝を祈るに至つては言
語道斷と言ふより外は無い、英獨露
墺、皆な悉く大なる偽善國である。明
白なる非基督教國である。

30 聖書の研究

ステパノの演説

大正四年四月
第一七七号

鈴木敏元氏寄贈

贈り書

この内村鑑三先生原稿、和紙毛筆二十八枚は、もと「内村鑑三先生御遺墨帳」の著者長谷川周治氏の所蔵されたものであるが、氏は晩年に至つてこれをいづれか適当のところへ寄贈して保存したい希望をもたれ、氏の知人である、曾て内村先生にマッサージ術を施した側近者である藤本重太郎氏のもとへ送つて、その措置を委託されたものであつた。藤本氏は色々と思案されたが、これを道行するに至らずして他界された。長谷川氏もつづいて召天されたのであつた。これより先、私は藤本氏の存命中にそれを頂いし、ことの次第を承知していたのである。その後私は重太郎氏の嗣子義雄君と会合した際、あの原稿のことを知るやと訊ねたところ、そのまゝわが家に保存して在ると云はれたが、彼の夭折せられる以前に本稿を私のもとへ持参され、是非角あなたにあゆるがうと云つて、おいて申かれたものであつた。

斯かる至純にして、私はこれを私の責任において、最善に措置を構じたいと念願して、二、三の先輩達にも諮つて考慮した結果、

このたび先生門下の有志の企画による「内村鑑三
先生記念文庫」へ寄贈することに決定した
次第である。
以上、ことの由縁を記述した贈り書を添えて
贈呈し、私の責任を解除していただくものである。
しかして、かくる帰結に到達したことは、長谷
川氏の寄与に負うし得る所甚大であろうと
信じ、神の栄光のために、且つは内村先生の
足跡をたずねる資料の一として永く保管
あらんことを切望する。

昭和三十八年(一九六三)三月

長谷川周治氏のために

鈴木俊元謹言

内村鑑三先生記念文庫
殿

毅置世話人

昭和三十八年三月廿一日

多年敬元

謹啓五六様

拝啓 小林先生記念文集拝受致しました旨
毎度のお葉書 誠に有難く存じます。
さて先般お届け申上げました贈り書を基
後撰を後預りました結果 文字の間違
等と考見し不適載と存じまして別に同封
の通り書き直しましたものを数部作成
おき下さるよう申し上げます。用いる
故 来る結婚の祝辞
当先生原稿一部 形成の書簡
取同封致しました。宜敷御取計ひ願ます。

敬白

ステパノの演説

使徒行傳六章八節より七章末節まで　内村鑑三

聖書之研究

（編者曰く、左に掲ぐる文は改譯と稱するが程の者に非ず、然れども所々に解譯を施し、字句の配列を改め、以て讀者の之を通讀して其大意を了解するに力めたり）

八　ステパノ恩惠と能力とに滿ち民の間に大なる奇跡と休徴とを行へり　九　然るにリベルチンと稱する會堂、クレネ人の會堂、アレキサンドリヤ人の會堂、キリヤ人及びアジヤ人の會堂の者等起てステパノと論爭す　十　而かも彼

等彼の智慧と彼が由て語りし靈とに敵する
ことを能はざりき十一彼等遂に人をして偽證
言はしめけるは「我等彼がモーセに對し又神に對し謗讟
の言を語るを聞けり」と十二彼等又民及び長老
並に學者等の心を動かし、突然來りて彼を執へ、
集議所に曳來り十三僞の證人を立て、言はしめける
は「此者は此聖所と律法とに對し謗讟の言を發
して止まず十四我は我等彼が言ふを聞けり、此ナザレの

イエスなる者此所を壞ち且つモーセの我等に授
けし所の慣例を易ふべしと言へるを聞けり」と
十五茲に於て集議所に坐せる者皆な目を彼に注ぎた
りしに、彼の面の恰かも天使の面の如くありしを見たり。
一時に祭司の長言いけるは「洵に然る乎」と二彼れ言ひけ
るは

2

兄弟及び父等よ、聽け、我等の先祖アブラハムがカラ
ンに住まざりし前、彼れ未だメソポタミヤに在りし時、彼に現れ
て言い給いけるは三「汝の國を出、汝の親族を離れ、我が

汝に示さん地に到るべし。四斯くて彼れカルデヤ人の地を
出てカランに住めり、彼の父死し後、神は彼を彼處
より此地に移し給へり、是れ汝等が今住む所の地な
り。五而かも神は此地に於て彼に何の嗣業をも與へ給
はず、否な、足を立るほどの地をも與へ給はざりき、
且つ彼に未だ子あらざりしに此地を所有として彼と彼
の後に生れん子孫とに與へ給へと約束し給へり。六
神はまた斯く言い給へり、即ち、彼の裔は他國に
寄寓ちん、而して其國の民に彼等を奴隷と

なし四百年の間彼等を苦しめんと。七神はまた言
い給へり、彼等が奴隷として仕へし國民を我れ鞫くべし、
而して後彼等其國を出て此處に於て我に事へ
んと。八彼は又彼に割禮の契約を與へ給へり、
斯くてアブラハム、イサクを生み、第八日に之に割禮
を行へり、而してイサク、ヤコブを生み、ヤコブ十二の
先祖等を生めり。九而して先祖等ヨセフに對し嫉妬
を以て然え、彼をエジプトに賣れり、然れど神は
彼と偕に在し、十すべての患難より彼を救出し、エジ
プト王パロの前に於て恩惠と智慧とを賜

へり、斯くて彼(パロ)は彼をしてエジプトを彼の全家
とを寄[illegible]らしめたり (十一) 茲にエジプトとカナンの全地に
饑饉ありて大なる困難ありたり、我等の先祖
等は食物を獲るを得ざりき (十二) 然るにヤコブ、
エジプトに穀物あるを聞き先づ我等の先祖
等を遣はせり (十三) 再度彼等を遣はしし
時にヨセフその兄弟の識[illegible]而してヨセフの
所とあれり、

聖書の研究

血族はパロに明らかにあれり (十四) 茲に於てヨセフ人
を遣はして其父及び彼の全家七十五人を己
の許に招寄せたり (十五) 斯くてヤコブ、エジプトに
下れり、彼は[illegible]死せり、我等の先祖等も亦
死せり (十六) 彼等は遠くスケムに運搬はれ、其處
にてアブラハムがスケム[illegible]に於けるエンモルの子等
より銀をもて買求めし墓に葬られたり。
然るに神がアブラハムに示し給いし約束の期近づく

に従い 民は[illegible]蕃殖してエジプトに増加り大斯くてヨセフの事を知らざる他の王の起りてエジプトを治むるに至れり十九 彼れ[illegible]策を以て我等の血屬を待い我等の先祖 謀計 等を困しめ、其嬰兒の生存せざらんがために之を棄てんことを命じたり二十 其時モーセ生れたり、彼は甚だ美しかりき、彼は其父の家に三ケ月間養育はれたり廿一 而して彼れ棄られし時パロの女 彼 を拾いあげ己が子として彼を育て月たり廿二 斯くてモーセはエジプト人のすべての知識を授けられたり、彼は又言語と行爲とに

聖書の研究

於て大なりき廿三 然るに彼れ凡そ四十歳に及びし頃 彼の心に其兄弟なるイスラエルの子等を見舞はんとの念起れり廿四 時に彼等の中の一人の侮辱せらるゝを見しかば之を防護りてエジプト人を擊ちて虚げられし者の仇を報いたり廿五 彼れ密かに思へらく彼の兄弟は神が彼の手を以て彼等に救拯を施し給いつゝあるを覺りしらんと、然れども彼等は覺らざりき廿六 翌日彼等相爭いつゝありければ彼れ彼等に現はれ、彼等を相

和げんとして曰いけるは「人々上、汝等 [redacted] は兄弟なるに何故に相い害 [redacted] ふや」と 廿七 其隣人を害ない
し者彼を却けて曰いけるは「誰が汝を立て、我等
の有司又は判官と為しや、汝、昨日エジプト
人を殺したごとくまた我をも殺さんとするか」と 二九
モーセ此言によりて逃れ、ミデアンの地に寄寓
もの
者となり、彼處に二人の男子を生めり 三〇 此上
聖書の研究
り四十年を経し後、天使シナイ山の曠野に於

て棘の中に火の焔の中に彼に現はれたり 三一 モ
ーセ之を見て奇ケ、更らに凝視んとして近よれ
る時、主の聲あり曰く 三二 「我は汝の祖たちの神、即
ちアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と、モーセ
恐怖れて敢て凝視のざりき 三三 主また彼に
曰い給いけるは「汝の足の履を脱け、汝が今立つ
處は聖地なり 三四 我れ正しくエジプトに在る我が
民の苦難を見、其悲歎を聞けり、而して今
彼等を救ふがために降れり、いざ来れ、我れ
汝をエジプトに遣さん」と 三五 夫れ彼等が拒みし
モーセ、誰が汝を立て有司又判官と為しや

て棘の中に火の焰の中に彼に現はれたり 三一 モーセ之を見て奇異ケ、更らに凝視んとて近よれる時、主の聲あり曰く 三二 我は汝の祖たちの神、即ちアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と、モーセ恐怖れて敢て凝視めざりき 三三 主また彼に曰い給いけるは「汝の足の履を脱け、汝が今立つ處は聖地なり 三四 我れ正しくエジプトに在る我が民の苦難を見、其悲歎を聞けり、而して今彼等を救はんために降れり、いざ来れ、我れ汝をエジプトに遣さん」と 三五 夫れ彼等が拒みしモーセ、誰が汝を立て有司又判官と爲しやと言いて拒みし此モーセを、神は棘の中に現はれし天使の手を以て有司又救者として遣し給へり 三六 此人彼等を導き出し、エジプト及び紅海及び曠野に於て四十年の間奇蹟と休徴とを行いたり 三七 モーセ、イエスラエルの子等に語り

人を殺したるを聞きて逃れ、ミデアンの地に寄寓モーセ此言によりて逃れ、ミデアンの地に寄寓者となり、彼處に二人の男子を生めり 三〇 此上り四十年を經し後、天使シナイ山の曠野に於

て「神は汝等の中より我が如き一人の預言者を
汝等のために起し給ふべし」と言いしは此人なり。
三八 曠野の集會の中に在り、シナイ山に彼に語り
し天使と偕に在り、又我等の祖先等と偕に在り
我等に授けんがために生ける言を受けし者は此人
なり 三九 此人に我等の先祖等は順ふことを欲せ
ず、反て彼等の間より彼を斥け、其心すでに エジ
プトに還り 四〇 アロンに語りて「我等を導くべき神

を我等のために造れよ、そは我等をエジプトの地より導き出したる彼のモーセは、我等彼の如何にありしを知らざれば也と

四一 斯て彼等は其時犢を作り、その像に犧牲を獻げ、己が手の所作を喜べり

四二 然るに神は彼等より其聖面を反けて、彼等が天の星を參るに任し給へり、即ち預言者の書に記されしが如し

イスラエルの族よ、汝等四十年の間曠野に於て犧牲と祭物を我に獻げしや

盗書の研究

四三 汝等はモロクの幕屋を擔ひたり、神のレパンの星を擔ひたり、汝等が拜せんために作りたる像を擔ひたり、

四四 我れ汝等をバビロンの彼方に徙さん

8

我等の先祖等は曠野にて證明の幕屋を有り、此はモーセに語れる者、彼が見し所の式に準じて之を作るべしと命せしなり

四五 我等の先祖等之を承けて、彼等がヨシユアと偕に異邦人の

神が我等の先祖等の前より逐ひ攘ひ給へ

地[redacted]に入来りし時に之を携来[redacted]りて
ダビデの時に到れり 四六 彼れダビデ神の[redacted]恩
蒙りを[redacted]てヤコブの神のために居所を設けんと欲へり。
四七 然るにソロモンは彼のために殿を建たり 四八 然れども
至高き神は手にて作れる所に居たまはず、預
言者の言へるが如し、
四九 主曰ひ給はく天は我が座位なり
地は我が足登なり
汝等我がために如何なる家を建んとする乎
聖書の研究

又我が息む所は何處なるや
五〇 我が手は此等凡ての物を造りしに非ずや 7
五一 頑強にして心と耳とに割禮を受けざる者よ、
汝等は常に聖霊に逆らふ[redacted]汝等の先
祖等の如くに汝等も行ふなり 五二 孰の預
言者をか汝等の先祖等は迫害せざりし、
彼等は義者の來らんことを預じめ語りし、
汝等は今その義者を附し之を殺す者と
なれり 五三 汝等は天使に由りて律法を受け猶
これを守らざる也
五四 汝等是等の言を聞きて心を刺され切齒して彼

四九 主曰ひ給はく天は我が座位なり
地は我が足登なり
汝等我がために如何なる家を建んとする乎

又我が息む所は何處なるや
五〇 我が手は此等凡ての物を造りしに非ずや

五一 頑強にして心と耳とに割禮を受けざる者よ、
汝等は常に聖靈に逆らふ 汝等の先
祖等の如くに汝等も行ふなり 五二 孰の預
言者をか汝等の先祖等は迫害せざりし、
彼等は義者の來らんことを預じめ語りし、
汝等は今その義者を附し之を殺す者と
なれり 五三 汝等は天使に由りて律法を受け猶
これを守らざる也

五四 彼等是等の言を聞きて心を刺され切齒して彼
に向へり 五五 然るに彼は聖靈に滿たされ天を凝視め
神の榮光と神の右に立つ所のイエスを見たり、
彼れ曰ひけるは 五六 「視よ、我れ天開けて神の右に
人の子の立てるを見る」と 五七 然るに彼等大
聲を以て呼はり、耳を掩ひ、一團となりて彼

に向て突進し(五八)彼を邑より逐出し、石をもて
彼を撃殺たり、而して證人等は其衣服を
サウロといへる壮者の足下に置けり(五九)彼等が
石をもてステパノを撃る時、彼れ主を顧みまつり(六〇)
て曰ひけるは「主イエスよ、我霊を納め給へ」と
又跪きて大聲にて呼はりけるは「主よ、此罪を
彼等に負はしむる勿れ」と、斯く言ひて彼は眠れり。

4

畧註

10

○此は有名なるステパノの大演説である、之に由て基督教は公然と猶太教より離れたのである、是に殊にパウロの自由福音の先驅である、異邦傳の曉の鐘の響である、モーセを辯護してモーセの律法を打破せし鉄槌である、無教會主義の最初の叫號である、人類の信仰史上、言である。

聖書の研究

[illegible] 新紀元を劃する至要の

つづく

○大演説である、然し乍ら大雄辯とは云へ、ステパノはアポロの如き巧妙なる言辭の使用者ではなかつた、能辯術の標準より評して此演説は多くの批難すべき點がある、其中に多くの無駄の言がある、

[illegible]

又思想の連結が甚だ緩慢である、モーセに就て説き終て少ビデに移るの邊は甚だ曖昧で

漠然

11

ある（四十五節）、簡潔は能辯の秘訣であるに
ステパノは知れ渡りたる猶太亞歴史の事實
を繰述して彼の聽衆に勘からぬ倦怠の念
を起したであらう。後の聖書の註解
者が此演説の解釋せし[illegible]に苦しみ
し理由の一は確かに其修辞上の缺點を
認めたからであると思ふ、縱令聖ステパノの
言であると雖も缺點は確かに缺點である、彼の

特技は能辯術以外、別に在つたのである。
彼は茲に善き演説を爲さんとはせず、
演説を爲した、彼の言辞は粗雜であつた、彼
の思想は貧弱であつた、然し力強き
であつた、彼の信仰は燃えて居つた。
○此演説の試みられし時と場合とは六章
八節以下末節に至るまでに於て明かである、
ステパノの新信仰に對して舊信仰の激烈なる

反對が起つたのである、其當時はエルサレムに多くの猶太教の教會があつた、リベルチニ教會と稱して猶太人にして一時異邦に奴隷たりし者の再び自由を得て其故郷に還り來りし者の相集りて組織せし教會があつた、埃及アレキサンドリヤ出生の猶太人にして エルサレム在住者の組織せし教會があつた、其他皆此類である、彼等は常に相互に教義を闘はし、教勢を爭い

聖書の研究

しも茲に共通の敵の現はれしを見て、一致團結して之に當つたのである、彼等がステパノの罪狀として數へし者は

明治新

あつた、

第一、聖所即ちエルサレムの神殿に對する誘讒

第二、モーセと彼の律法に對する誘讒

彼等は以上の二箇條を提げて誘讒罪を

13

以て彼を當時の高等法院（サンヘードリム）に訴へたのである。（即ち議所）

○茲にステパノは独り祭司（民及び）の長、長老並に學士者等の前に立つた、彼は彼の主イエスが審判かれしが如くに審判かれたのである、二者の罪狀も同じである（馬太傳二十六章）、審判人も同じである、（イエス）を見よ、弟子は其師に優る能はずである、ステパノはイエスの如くに審判かれて彼の寃に[redacted]の弟子であることを識つたのである、寃にハらの言（聖書の研究）

キリストの死の狀に倣ひて[redacted]彼の苦難に與かることであつて、ステパノに取り名譽此上なしである（腓三比書三章十節）。

○茲に審判は聞かれた、ステパノの面は天使の面の如くであつた、[redacted]彼は勿論彼の冤（放）れざると識つた、彼は彼の前に讎敵を控つたので曳れて彼は彼等を憎まずして反て彼等を愛（いん）した、故に敵人の前に、然し彼はイエスの弟子であつた、

た、愛は此際彼を離れなかつた、彼の言は慇懃であつた、彼の態度は平靜であつた、今や居所に[illegible]牽かるゝ羊の如く[illegible]りし彼は虔みて狂暴[illegible]言を放たなかつた。

○「兄弟及び父等よ」と彼は口を啓いて言ふた、彼の生命を狙いし敵は（彼に取りては）敵である、兄弟である、父老である、閑日一番、彼の唇より洩れし此一言は蕩解の情味あくんばあらずである、[illegible]と演說は言を語でなさいと[illegible]

情である、親愛は充てる此肩頭の一言にステパノは既に聽衆の心思を奪ふたのである（一節）。

○敵人の告訴に對してステパノは自己を辯護せずして、之に代へてイスラエルの歷史を述べたのである、是は最も[illegible]（不思議なる）辯護（法）である、然し彼に取りては最も有力なる辯護（法）であつた、彼は聖殿と律法とを謗讀（がとく）として訴へられたのである、而して聖殿と律法とはイスラエル歷史の眞髓である、

故に歴史的に二者の何れか手を述べて、彼は最も有効的に自己の立場を辯明するために出来たのである、自己の辯明を議論に取らずして歴史に取りし彼の智慧は、是れ此際上天より彼に賜はりし者であると言はざるを得ない（馬可傳十三章十一節参考）。

○彼は先づアブラハムの歴史を以て始めた、其数う引用書の研究る所は何ぞ、アブラハムは勿論モーセの律法に何の

関はる所はない、故にステパノは彼の罪狀に就て自己と辯明するに方てアブラハムを引用するの必要はなかつた、然し乍ら聖殿謗讟の誣告に就ては（多くの）イスラエルの始祖アブラハムの事跡に之を辯明するに足る者があつた、聖殿抑々何物ぞ、聖殿の奪きは其内に神の在ますに由る、然りと雖も神は其在在をエルサレムの聖殿に限り給ふ者に非ず、神は屢々聖殿以外に於て人と語り

給へり、アブラハム未だカランに住まざりし前、猶は
未だ異邦のメソポタミヤに在りし時、神は彼處に
彼に現はれ、彼の往くべき所を示し給へり、依て知
る神の聖殿の世界の廣きが如くに廣きと、神あり、
又之に應ふるの信仰ありて世界何れの處が聖殿
ならざる、現は、神、アブラハムに伴れ給へて彼の到る所に
彼に現はれ彼に語り給へしことを、アブラハムの歴
史は神人交通の歴史と稱して誤らないのである、

神はアブラハムを其支と呼び給ふた（歴代史畧下
二十の七）、而して神アブラハムは曾て一回も エルサレム
の聖殿に神を拜した事はないのである、アブラハムの生
涯は聖殿に些（すこし）も關係が無つた、神は彼に
子孫繁榮の約束を爲し給ふに方て（五節）
彼を聖殿に召び給はずして、彼を野外に携（つれ）い
だし天の星を指して折言れて言い給ふた「汝の子
孫は是の如くなるべし」と（創世記十五章

五十節）、[redacted]アブラハムに取りては彼の足、[redacted]の印
する所が悪く聖殿であつた、モレの橡樹（かしのき）
（全十一章九十節）、マリベウの洞穴（ほらあな）、彼に取りては
悪く「聖所」であつた、故に若しエルサレムの聖殿以外（全廿三章九節）
に神を求めこれに事ふるのが謗讟罪であるふ
らば先づ第一に此罪に陥るべき者はイスラ
エルの始祖アブラハムである、而してステパノは其

師イエスに倣い、エルサレムの聖殿以外、世界
到る處に神の聖殿を認めて（約翰傳四章廿
節）始祖アブラハムの跡を逐ひつゝあるのである、祭
司、長老、與士書等は先づアブラハムと罪を
然る
定めて後にステパノを糾すべきであると、是れア
ブラハムの歴史がステパノの辯護となつた理
由である（二節以下八節まで）。
コステパノはアブラハムの子イサク、イサクの子ヤコブの

並に

18

歴史に就て述べる所があつた、然しヤコブの子ヨセフの経歴に就て一言語らざるを得なかつた、ヨセフの十一人の兄弟等（「先祖等」とあるは彼等である、イスラエルの十二の支派の先祖等を指して言ふのである）……ヨセフの十一人の兄弟等は彼に對して嫉妬を以て燃え、父に隠して彼をエジプトに売つた、然るに彼等の棄てし者を神は拾い給ふた、神は彼と偕に在して、すべての

聖書の研究

患難より彼を救出し給ふた、而已あらず、神は大に彼を恵み給ひ、彼を以てエジプトとパロの家とを治めしめ、又終に其父ヤコブと其全家とを饑饉より救ひ給ふた、ヨセフの墓場に於ても亦、「工匠の棄てる石は家の隅の首石となれり」との古き讃歌は事実となりて現はれた、而してステパノと彼の主なるイエスとを勦かんとする祭司、長老、学者等は

のである

19

用考すべきである、彼等も亦彼等の先祖等に倣い茲に無(い)き事を勤きつゝあるのではないか、彼等が異端視する者は亦ヨセフの如くに神の前に特殊の恩恵を蒙る者ではないか、彼等はヨセフの経歴に省みて大に自己を謹むべきではないか、ステパノは此處に彼の国人の熟知(さぞ)したるヨセフの事跡を反復して暗々裡に自己を勤く者を勤いたのである。九節以下十六節(まで)。

○次(つぎ)項はモーセである、前に述べしやうに、ステパノは二箇の罪状を以て訴へられたのである、其第一は聖殿に對するの罪(であつた)、第二はモーセと其の律法に對する罪であつた、而して彼はアブラハムの経歴を述べて罪状第一に對する自己の辯護を述べた、聖殿[illegible]彼の態度の[illegible]第二[illegible]に對しても亦同じである、ステパノは茲に自己を辯護するに方てモーセの経歴を述ぶれは足

りなのである、彼は言ふたのである「汝等は余は
モーセに叛き其の律法を[illegible]紀したりと云ふ、然らば
モーセ自身をして語らしめよ、彼れモーセは余の辯
護者たらん、而已ならず、彼は余を[illegible]見訐して
反て汝等を告訐せん」と。

○抑々モーセに叛きし者は誰なる乎、彼が未だパロ
の女ひすめに養はれてエジプトに在りし時に、彼は彼の
骨肉の兄弟なるイスラエルの民を救はんと念ひて起
ち、然るに民は却て彼を卻け、彼をしてエジ

聖書の研究

プトの地を遁れざるを得ざるに至らしめたり。斯くてモーセ
に對する叛逆は斯くステパノを以て始まったのでは
なく、今や彼を審判きつゝある者の祖先等を以て
始まったのである、然り、イスラエルの歴史はモーセ
に對する叛逆を以て始まったのである、齊しく
哉イスラエルの祭司と學者等がモーセに對す
る叛逆を理由として他人を審判かんとは、
叛逆人、叛逆の罪を審判き得る乎（十

七節以下二十九節まで）。

○イスラエルの民はモーセを逐（おも）へり、然れども神は彼を護り給ひて彼の流竄の地なるミデアンの地に於て彼に平和の家庭を供（そな）へ給へり、而して時期到来するや、撰民救出の時期到来するや、神は曠野の森（しば）の中に彼に現はれ、彼をエジプトに出追せし給へり、モーセの場合に於てもアブラハムの場合に於けるがごとく、神は聖殿ならびシナイの曠野に於て彼に現はれ給へり、神は人

聖書の研究

が其友に言ふ如くにモーセと面を合せて言ひ給へり（出埃及記三十三章十一節）、「汝の足の履（くつ）を脱（ぬ）げ、汝が今立つ處の地は聖地なり」と言ひ給ひし其地は エルサレムの聖所にはあらずして、シナイ半嶋曠野の一點なりき、

聖殿以外又聖殿のあるあり、モーセ自身が聖殿以外に於て神を拝せり、モ

ーセに倣ふて地上到る處に神の自顯に與かり人を欲す、豈之を稱して聖殿講讃と云ふを得んや（三十四節以下三十四節まで）。

○イスラエルの民が拒みし此モーセ、此モーセ、イスラエルを救ひ給ふたのである、

[redacted]

プトより救出し、四十年の間曠野に彼等を導いたのである、

[redacted]

イスラエルの民は彼等の恩人、彼等の教導者ふるモーセに對して決して忠實ではなかつた、否ふ、甚だ反對が事實であつた、彼等は幾回か彼に叛いた、幾回か彼の心を傷ましめた、時には彼をして

23

嗚呼此民の罪は大ふり、彼等は自己のために金の神を作れり、然れども若し聖日に かふはい彼等の罪を救し給へ、然かせずば願くは爾の生命の書より我名を銷り給へ

もの悲歎の聲を揚げしめた（出埃及記三十二章
三一、三二節）、イスラエルの歴史は之モーセに對する
叛逆の歴史であるのである、モーセに叛き其律法
を破りし者はイエスと其弟子等にもあらずして、不忠
不虔の故を以て彼等を迫害し彼等を殺
せしイスラエルの民自身である、奇異ある哉、
叛逆人の子孫に由て叛逆の理由を以て鞫
かるるとは（三十五節より四十三節まで）。

○再び聖殿に就て言はん乎、聖殿は元始より
存ったので■はない、神がモーセに命じて作らしめ
給へる者は聖殿と稱するが如き壮厳ある大
建築ではなかった、唯単に「證明の幕屋」
であった、エホバが民の間に在して彼等を救へる
所であった、而してモーセ眼りてヨシアに代
りて民の教導者となるや、彼は此[illegible]
幕屋を携へて約束の地に入り、其處に再び之を

張りて[redacted]其師モーセの準に從ひ、單純なる曠野の禮拜を續けてダビデの時にまで至つたのである。而して神恩裕かにダビデの身に加はりしかば、彼は報恩の[redacted]記念として、ヤコブの神が永久に在し給ふ神殿を作り、以て一時的の幕屋に代へんとした、然るに彼は躊躇して此事を[redacted]決行せずして眠つた、而してソロモンに至て此下心が[redacted]大規模に實行されたのである、而して神は之を

聖書の研究

を懲び給いし事と言ふに、決して厭うではあかつた、彼は言い給ふた、

天は我が座位なり、地は我が足登なり、汝等我がために如何なる家を建んとするや、又我が息む所は何處なるや、汝等知らずや、我手は此等すべての物を造りたりと

25

と、斯くて神は[redacted]この大聖殿を嘉納し給はあかつた、其事は其後の治世この單純なる經歷に由りて明かである、モーセの定めし天幕[redacted]禮

幹を廢して之に代へて莊嚴なる聖殿を築く事を以てせしソロモン王は墮落より墮落に沈み、終にはイスラエルの神エホバを棄て異邦の神に事ふるに至つたのである、而して事は茲に止まらなかつた、神はイスラエルを離れ給ふた、ソロモン以後のイスラエルの歷史は背信、分離、滅亡のそれであつた、ソロモンは莊嚴ある神殿を築き

て、神をイスラエルの間に招召講せずして却て之を遠ざけたのである（四十四節より五十節まで）。

○頑強にして大切なる身に割禮を受けずアブラハムの子孫たりと誇るも心と耳とに割禮を受けざる者等よ、汝等はモーセと其律法に從ふと稱して汝等の叛逆人である、汝等は聖靈に逆らひ、汝等の先祖が行ひしが如くに行ふ、預言者にしていつてあるのである汝等の先祖等の迫害を蒙らざりし者

ある手、[illegible]、彼等預言者が其出
現を預言せし者[illegible]を殺せり、
子は能く其父に似たり、汝等は祖先の行為
に倣ひ、預言者等が其出現を預言せし大
預言者イエスを殺せり、汝等は律法の
破壞者なり、彼等は天使の手より受たり
と誇る其律法を守らないのである（五十一節
より五十三節まで）。

＊＊＊＊＊＊＊＊

○ステパノの辯護演說は遂に終つた、
鞫かるゝ者は鞫かれずして却て鞫く者を
鞫いた、知れ渡りたるイスラエルの歷史は新らし
き意味を以て民と參議員等の前
に提示された、而してイエスの福音は歷史的
に最も有力に辯護された、審判の座に
坐りし者は今や答ふに言葉が無つた、彼

等は唯威力を以て等を辯に代ふるのみであつた、彼等は怒つた、切齒した、叫んだ、終に一同石を取て無接のステパノ目掛けて進んだ、一齊に彼を打つた、而して彼が抗拒するかと思ひしに、彼は唯天を仰いで坐した、彼の靜かなる眼には憤怒に驅られし敵は見えずして神の右に坐せるイエスが見えた、不幸なるは今や石に斃されて死せ

人とする彼ではない、彼を殺さんとする彼等である、茲に於てか彼は今生の最後の祈禱として聲を勵まして言ふた

主よ、此罪を彼等に負はしむる勿れ

而して此一言を發して生氣絶えた、

而して此暴行の煽動者をタルソのサウロと稱ふた、彼はステパノの此死狀と最後の

別行

一言を聞いた、彼は心安からずして家に歸つた、茲に彼ルソ■ウロの心の中に大(類悶)動が始まつた、此ソウロを後にパウロと稱めた、彼は福音の大傳道者となつた、彼に由て世界と人類とは一變した、而して彼の感化は今猶ほ盡きない、ステパノはパウロを以て全世界にイエスの福音を傳へたのである(五十四節より六十節まで)。

聖書之研究

福音大觀

大正四年十月
第一八三号

岩井德積氏寄贈

福音大觀

十八行

内村鑑三

聖書之研究

一 九月十四日宇都宮本曜會の招きに應じて語りし所

二字下ゲ 6にて

約翰傳三章十六節の註釋

神

ケア

驚くべき名である、我等は彼に賴りて生き又動き又存ることを得るなりと云ふ其神である（行傳十七の廿八）、萬世の王即ち朽ちず見えざる一の神と云ふ其神である（提摩太前書一の十七）、萬物は彼より出、彼に倚り

彼に歸ると云ふ、其神である（四維馬書十一の世六）、萬物の起元にして其終局、萬物を支え之を充たす者、宇宙が倚て立つ其根柢、其れが神である。

愛し給へり　此神は單に統治る者でなく、單に審判く者でなく、全智全能であると同時に愛する者である、愛は彼の特性である、故に神は愛なりと云ふ。彼は聖くある、義しくある、永遠の光である、然れども特に愛であって人に近づき給ふ者である、神は愛し給ふと云ふ、是れ既に大なる福音である、人類はキリストに由りて初めて明白に此事を聞いたのである。

世　此罪に沈める世と其中に在るすべての人、

聖書の研究

誰れ彼れの差別はない、全世界の人を神は
愛し給へり又今猫は愛し給ふと云ふ、神は
善人を愛して悪人を憎み給ふと云ふのではない、
彼は又義人を近づけて罪人を作け給ふと云ふ、
のではない、彼は世を愛し給ふたと云ふ、衆生
じゃう、全人類、全世界のすべての人を愛し給

墨書の研究

ふと云ふ、神の愛は普遍的である、彼の愛に
善人悪人の區別はない、特に白人黄人黒人の種
差別はない、神は世を愛し給へりと云ふ、即ち
全人類を其愛の中に抱み給へりと云ふ、
世の人も神の愛に漏るる者はない、神は世を
愛し給へりと聞いて亦我をも愛し給へりと言

ふことが出來る、萬人救濟の眞理は斯くて
明白に聖書に示されてゐるのである。
其生まれる独子を賜ふほどに
彼は全世界全人類を愛し給へり、而して其
愛の程度たるや、其生まれる獨子を賜ふ程
に之を愛し給へりと云ふ、我等が知る愛の中に
人が其子を愛するに優るの愛はない、人は自分と

28

聖書の研究

4 ウミ ひとりご

4 ウミ ひとりご

3

4

りも其子を愛するのである、縱し彼に二十人の子
があるとするも彼は其各々を自分よりも愛す
るのである、而かも神が世を愛し給ふ愛は其一
人子を捐てし惜しと思い給はざりし程の愛
であると云ふ、全宇宙に之よりも切なる、之よりも
深き愛はないのである、神は其生み給へる一人子
を愛し給ふ愛を以て世を愛し給へりと云ふのでは

猶ほ

4

たい、其一人子を惜み給はざりし程に之を愛し給へりと云ふのである、嗚呼、如何ばかりの愛ぞ、我等は是れ以上の愛に就て思惟することは出来ない、無限大の神が罪に沈める世を無限に愛し給へりと云ふ、驚くべき福音とは此事である、神は何故に斯くまで世を愛し給ふのである乎、世に苦し不思議があれば此事である、

神は其生み給へる一人子を賜ふ程に世を愛し給へりと云ふ、而して我も亦一人の人として彼の此愛を[illegible]蒙れりと云ふ、苦しキリスト以外の者が此事を告ぐるならば、[illegible]何人も之を信じないであらう、然れども聖子御自身が此事を告げ給ふ[illegible]故に、我等は喜ばしくも恐れ慄くな

別行

とおくして悍馬すして之を信ぜんと欲するのである。
斯くて神の側に在りては彼は極度の愛を以て全
人類を彼の愛の懷に藏の給ふのである、神の
立場より見て今や詛ふべき罪に定むべき人とては
一人も居いのである、神は既に其極度の愛を以て
世を己れと和がしめ給ふのである、然し乍ら和
平の方に於ては神と雖も唯一方の愛を以てしては

之を成就する事は出來ないのである、人の側より
神の愛に應ずるの必要があるのである、神は既に
全人類を愛し給いたれば人は其愛を認めずとも
其恩化に浴する事が出來ると思ふのは、愛の性
質を解せざるより起る誤謬である、愛は相互的
である、愛し愛しられて愛は成立するのである、神
は其生み給へる獨子を世に賜ふて、世人何人にも愛

せらるべき態度に御自身を置き給ふたのである、
平和は神より申出されて、彼は人の之に應ずるを
待ち給ふのである。

⑥

約翰傳第三章十六節は其上半節に於て神
が人に對する態度を示し、下半節に於て人が
神に對して採るべきの途を示すのである、神は彼の側
に於て其極度の愛を以てすべての人に臨み給い

たれば人は其信を以て神の愛に應じて、滅亡を免か
れて永生に入るべしとの事である。

凡て何人にまれ、聖人にまれ、俗人にまれ、義人に
まれ、罪人にまれ、ユダヤ人にまれ、ギリヤヤ人にまれ、
モーセの律法を守るユダヤ人にまれ、之を守らざ
る異邦人にまれ、人と云ふ人は何人にまれ。

彼を此救ふべき愛を現はして世を御自身に
和らかしめ給いし神を。其生み給つる獨子を賜ふ

程に此罪の世を愛し給ひしイエス、キリストの御父なる
4 唯一の神を。

7

信ずる者　神の此極度の愛を信ずる者。道徳
的に完全に成れる者ではない、或る一定の儀式を
缺かず守る者ではない、バプテスを受けて教會に入りし
者ではない、神の此愛を信ずる者には云々とのことで
ある、神の愛に對する人の信である、神は其愛を
以て世に臨ませたれば人は其信を以て之に應じて永

聖書の研究

生に入るべしとのことである、信は神が人より要求し
給ふ永生獲得の唯一の條件である、先づ行爲
を改めて然る後に信ぜよと云ふのではない、バプテスの
式に與り教會に入りて信を表はすべしと云ふのではない
、信に前提はないのである、信は單純である、只
信ずることである、儀式にも道德にも何の顧る
所なくして信ずることである、然らば亡るとおくして
永生を受くべしとのことである、實に簡短である、
3

實に平易である、而して亦何人にも爲し得る所である、信ぜよ然らば救はるべしとのことである、神の御申出の餘りに偉大なるが故に、人の之に對する應酬は餘りに輕微である、神は其生ける絵へる独子を賜ふ程に汝を愛し給いたれば汝は只其愛を信じて救はれよと云ふのである、愛は良に相互的である、然れども神と人との間に在りては實

神に重くして人に輕くある、神は責任の全部を荷い給ひて、人は之に對して只應諾(信)を與ふれば濟むのである、愛、愛、愛、神の愛、キリストの愛、愛なるが故に人より或物を要求し給ふ、然り、單に信を要求し給ふ、應諾を要求し給ふ、而して責任の全部は神御自身之を荷い給ふ、世に斯くも割りの善い取引がある

9

であらう乎、而かも是れ神が人を救ひて彼に
永生を賜ふ途である、驚くべき哉。
亡ぶること無くして　其生命を喪ふことなくして、
人として~~本固有生~~固より有すべき不滅の生を棄る
ことなくして
永生を受けしめんが為なり　キリストを偕に甦へ
り、その萬物を己に服はせ得る能に由りて此卑し
き體を化て其榮光の體に象られて、神の子

10

として達し得べきすべての完全に達せしめんが為なり
とのことである、一言に約めて云へば救済を完成せ
んがためである。~~神の擬似の犠牲を之に罰する~~
~~人の簡単なる信仰と、其目的とする~~
~~我等罪人を離れたるが、神~~
~~もとを創造　最初の目的に合~~
~~成する。~~

また實にキリストの福音のすべては約翰傳の此一節の中に含まれてある、天の高きも地の低きも之に及ばず、敬慕すべき神の愛とは此事である、我等がすべて求め又思ふ所に過ぎて貴きは此福音である、

一字

神は愛し給へり　此世を　其生み給へる獨子を賜ふ程に

凡て彼を信ずる者に亡ぶることなくして永生を受けしめんが爲に。

一字一句に純金の重量がある、無量の文字は一字も去ず、上下の二半に分かれ、上なる者は神の行爲を示し、下なる者は人の態度を明かにす、全節が大福音である、而して其一字一句に宇宙の響きがある、神ならでは此言を發することが出來ない、而して此言を發したる者は神より出たる者であって、神でなくてはならない。

発行満十五年

大正四年十月
第一八三号

藤本武平二氏寄贈

36

聖書の研究

11

聖書之研究

發行滿十五年

○「聖書之研究」が社會に四言(のこし)られ、教會に呪(のろ)はれ、敵人に嘲(あざ)けられながら其第一號を發行したのは明治三十三年即ち一九〇〇年の十月二日であって今を去る丁度十五年である

3
十八行
1

る、實に此不信國に在りて聖書の雜誌を
發行するなどであって、而かも教會宣教
師等よりは何の援助をも望まざる事で
ありしが故に、其繼續は他にも我れにも
甚だ危ぶまれたのである、然るに何ぞ計らむ、
此不人望なる雜誌が十五年の長き間

105
聖書の研究

其獨立的存在を續けしとは、是れ決して
金輩の業では無い、神の行爲である、此
事に就ては金輩は神を讃美し奉るより
他に此時に於ける金輩の感慨を述ぶる
途を知らないのである。
東洋の某地に働かるゝ
○近頃或る有力なる米國宣教師の訪

2

問を受けた、彼は金輩に問ふて曰ふた、「君は何人に頼りて君の傳道を行ふや」と、金輩は明白に遠慮なく彼に答へて曰ふた「第一に神に頼り、第二に自己に頼り、第三に國人に頼る、其他、教會や宣教師に曾て一回も頼りしことなし」と彼は[illegible]更らに金輩に問ふて曰ふた「我等外國

106
聖書の研究

宣教師は如何にして東洋人の間に斯かる信仰を起すを得んや」と、金輩は此敬愛すべき宣教師に斯くも明白に金輩の行動に就て告白し得るの特權を與へられしことを神に感謝する、若し『聖書之研究』が日本國に於て何にか永久的

の善事を果遂たらば、其事は日本人は教會や宣教師の援助を藉りず して日本國に在りてキリストの單純なる福音を宣傳ふることが可能ると云ふ事である、キリストの福音其物が大勢力である、キリスト御自身が最大の助者である、此助者と勢力とありて我等は

107 聖書の研究

大臣とか富豪とか、教會とか宣教師とか云ふ者の援助は少しも要らないので ある、我等は彼と自己とに頼りて永久的の或る一事を成就することが可能るのである。

○彼の援助に依りて過去十五年を聖き樂しき業の中に過すを得た、同じ援

助に依りて来るべき十五年又は二十年又は三十年を過すを得るであろう、余輩の筆が余輩の手より落つるまで余輩は此喜ばしき事業を廃止ふであろう、余輩の視力の續く限り余輩の筆は動くであろう、イエスキリストに現はれたる天父の愛を語て尽るに方て十五年の長きも唯一日の如くに感ぜらるゝのである、此事に當て余輩は詩人の言を借りて言ふのである、

我心は美はしき事にて溢る
我は王のために詠たる事を語る、
我が舌は速急く寫字く人の筆ゝ。

（詩篇第四十五篇第一節）。

○終りに臨み十五年の長き間、余輩の拙き筆に厭きずして本誌の購讀を継續られし許多の讀者諸君に感謝す、又

108 聖書の研究

事務に於て、編輯に於て、無私の援助を借し惜きざりし我が信仰と患難と勞働との友に深謝す。

大正四年（一九一五年）十月

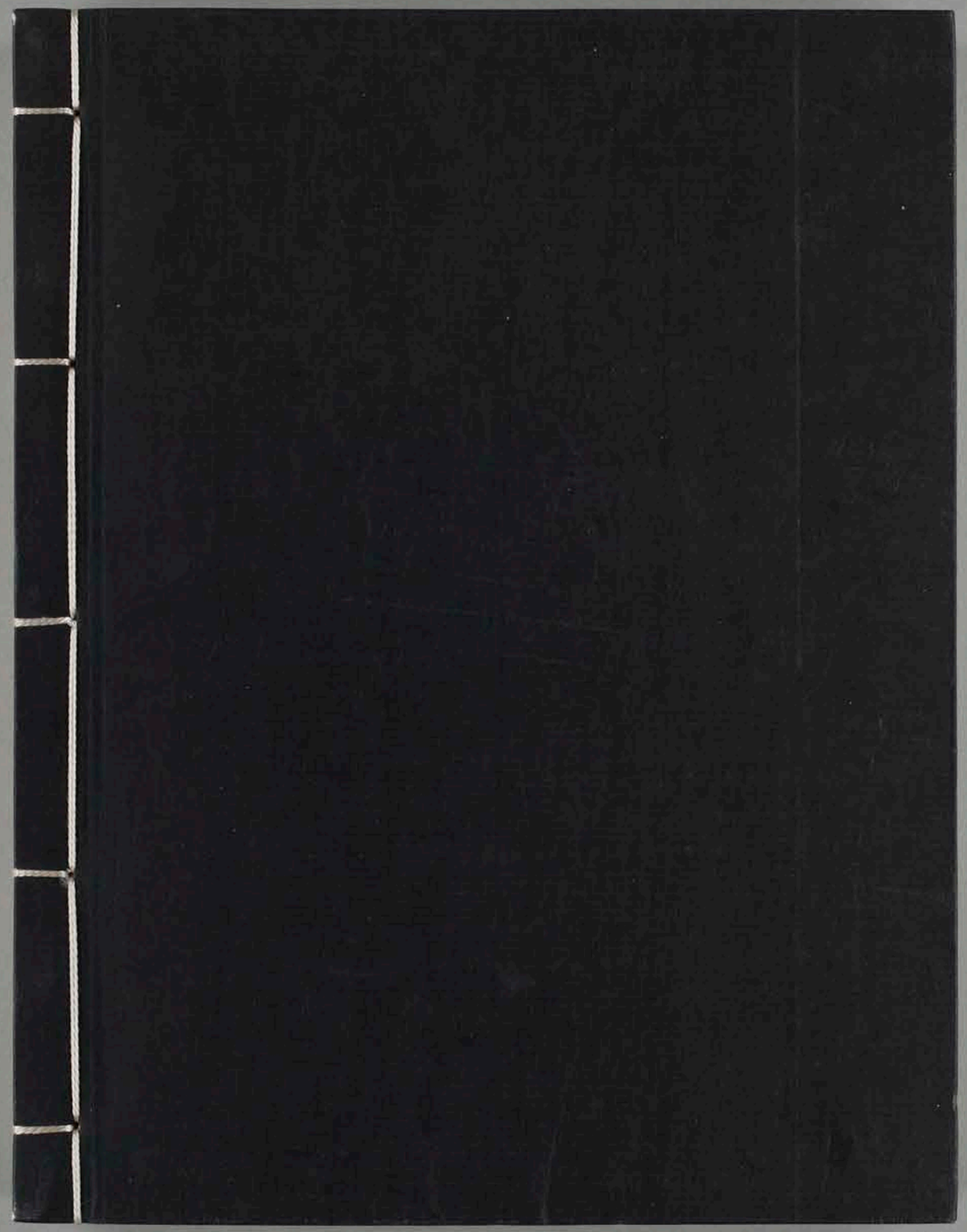
内村鑑三

4

御斷はり）

基督教會、基督教青年會、宣教師學校、其他教會並に宣教師に直接間接の關係ある高壇よりする說教演說の御依頼、堅く御斷はり申上候。

大正四年十月

内村鑑三

109 聖書の研究